
クルーゼになった男

RENESES

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルーゼになった男

【Nコード】

N33410

【作者名】

RENEISIS

【あらすじ】

機動戦士ガンダムSEEDの登場人物、ラウ・ル・クルーゼに憑依してしまった主人公。スタートは、原作と同じヘリオポリス襲撃からです。主人公の過去の話を織り交ぜながら、物語は進んでいく事になる予定です。

第1話（前書き）

オリ主憑依による原作改竄モノです。

原作を無視した独自設定や展開・解釈・キャラの性格改変・カップリング等が出てきます。

また、ガンダムSEED世界の設定や時系列もかなり狂っちゃってます。

その辺を許せない方にはお勧めできません、悪しからず御了承下さい。

あと、拙い記憶を頼りに書いてますんで、名前や地名の誤記の指摘をしていただけますと、とっても助かります。

第1話

望遠スクリーンに写ったヘリオポリスを見つめながらオレは言葉を発した。

「……………で、ヘリオポリスからの回答は？」

その言葉に真横に立っている艦長のアデスからすぐに返事がくる。

「はっ！ 当方に該当する船は入港していない。よって、貴艦隊はヘリオポリスの領空から即時退去せよ。」

そこで一旦言葉を切り、こちらに苦笑を浮かべながら続けた。

「……………の一点張りですが、どうされますか？ クルーゼ隊長？」

そこでオレは、かけたサングラスのブリッジを左手の中指で押し上げながら返事をした。

「当初の予定通り出撃する。もつそろそろ議長から暗号で指令も送られてくるはずだ。」

「どうしても出撃なさいますか。」

オレ自身が出撃するのをあまりよく思っていないらしく、少し顔をしかめながら告げてくるアデス。

「何度も言っているが、この作戦は今後の戦局の重大なターニングポイントの一つになると考えていてね。その大事な局面に、隊長であるオレ自らが出撃しないで、何時、出撃するというんだね。」

まだ何か言いたそうなアデスだが、隊長であるオレの立場を慮ってかあまり強く言ってくる事はない。

なぜ大事な局面なのか？ 本当の事が言えればたいへん楽なのだが、言えば言ったで間違いなくイタイ人認定されて、なんとか培ってきた信用がアツと言う間に失われるので、そういう訳にもいかない。

(オレはラウ・ル・クルーゼに憑依した中のヒトっばいんです。それでもって、この世界は見た事があるテレビアニメ、ガンダムSEEDとおなじ歴史を辿っているです。)

……言えないよなあ、やっぱり。

ちなみに憑依したタイミングはとっても悪く、クルーゼが失敗作としてアル・ダ・フラガから放逐された日だったりしたからもう……。

「よくここまで生きてこられたもんだ。」

「は？ クルーゼ隊長なにか？」

思わず漏れてしまったつぶやきに反応したアデスに、首を振って何でもないと返すと、艦橋を後にしてロッカールームに向かうこと

にした。

すっかり慣れてしまった無重力の通路を進みながら、オレは改めて実感していた。

(これが、ソラ……か。)

クルーゼを見送った後、思わずアデスはため息をついてしまった。意図せず大きめだったらしいそれは周りに聞こえてしまい、ブリッジクルーのあちこちから笑いが漏れている。

「うちの隊長の現場第一主義は今に始まった事じゃないでしょう。いい加減諦めたほうがいいですよ艦長。」

笑顔でそう言ってくるオペレーターに、アデスは居住まいを正しながら告げた

「それは判っている。ただ、もう少し己の重要性を認識してもらいたいと思ってな。」

「それは、そうですね。戦績だけとつても、どれだけ戦意高揚につながったか判りませんからね。」

「さらに出直……、」

そう言いかけて、言葉を切るアデス。

「いや、言っても詮無い事だな。だが、少なくとも私は彼の下で戦うことに誇りをもっている。だからこそ、少し自重してほしいのだがな。」

「そうですね。少なくともクルーゼ隊に所属している面々は、皆艦長と同じ考えだと思えますよ。」

もちろん自分もですと告げる事を忘れないオペレーターに、苦笑するしかないアデス。

少なくともクルーゼ隊の隊員たちにとって、クルーゼは信頼するに足りる隊長である事に疑いはなかった。

「イザーク、そんなにイライラしてもしょうがないじゃないか。ブリーフィングが始まるまで、まだ少し時間があるぜ。」

腕を組み、しきりに時計を気にしているイザークにたいして、茶化す様に告げるディアツカ。

「うるさいぞ、ディアツカー！ おかしい、いつも必ず早めに来るのに。……まさか！ 隊長の身に何か起こったのか?!」

「このヴェサリウスの艦内で、何が起こるって言うんだよ。」

付き合いきれないと言った雰囲気を出しながらディアッカがそう返すと、何を思ったのか部屋を出ていくイザーク。

「オイオイ？ 今からいったい何処へいくつもりだ？」

座っていた椅子から腰を浮かせて、慌てた口調で問うディアッカだったが、イザークは全く取り合わず、そのまま通路へ出るとどこかへ行ってしまった。

啞然と見送りかけたディアッカだったが、気を取り直すと髪をガシガシと掻きながら後を追っていくのだった。

そんな2人の様子をそばで見っていたニコルは、呆れた口調で隣に座るアスランに話しかけた。

「なんていうか、イザークの隊長への傾倒ぶりに磨きがかかってますよね？」

同意の苦笑ぐらい返ってくるだろうと思っていたニコルだったが、アスランからの返事がこない。

不思議に思ったニコルだったがアスランを見て、納得してしまっ

た。イザークの出て行った廊下をジッと瞬き一つしないで見ているのだが、妙に落ち着きのない雰囲気、椅子から腰が少し浮いている感じもする。

（アスランもイザークと同じですか……。。行動に移せるイザークの方がいいのか、黙って耐えているアスランの方がいいのか

か？ その辺、クルーゼさんはどう思っているんでしょうね？)

そう思いながらニコル自身も、音楽を共通の趣味とするレイ・ザ・バレルと言う親友を紹介してくれたクルーゼの事を考えていた。

『2人でリサイタルを開く時は、特等席で聴かせてくれよ。』

口癖のようにそう言って、休日にはニコルとレイが弾くピアノを嬉しそうに楽しそうに聴いてくれるクルーゼは、ニコルにとって頼りになる年上の兄の様な存在なのである。

ロッカーの前で、忠犬の様にジッと待っているであろうイザークと、何だかんだ言いつつそれに付き合うディアッカの様子が目に浮かび、普通に笑みを浮かべるニコルだった。

誰もいないロッカーでノーマルスーツに着替えながら、オレは今回の作戦の最重要項目を頭の中で反芻していた。

(なんととしても、ガンダムを五機全て手に入れる。そうすれば、キラ・ヤマトが係わる事のない展開に持つていけるかもしれない。よく言われる、歴史の修正力とやらが気にならないと言ったらウソになるが、こればかりは出たとこ勝負で行くしかない。もつとも、だからこそ、オレ自身がストライクを手に入れる為に、ではる事にしたんだがな。)

そんな事を考えながら着替えていると、議長からの指令が届いたとアナウンスが入った。

了解し、ブリーフィングルームに向かう事を告げると、両手で両ほほを叩いて気合を入れた。

胸のポケットにギルから送られたディスクがある事を確認し、思わず笑みが漏れた。

「さて、本編のスタートだ。オレは生き延びる事が出来るかな？
もっともその為に、今までも色々小細工はして来たんだがな。」

このディスクも、ある意味その小細工の一つではある。

この世界で最も頼りとする相棒が危険を承知で託してくれたディスクを見る事で、緊張を解く事が出来たオレはロッカーを後にするのだった。

「……………？ どうしたイザーク。こんなところで何をしているんだ？」

ロッカーを出たところでイザークと出くわしたオレは面喰っていた。

イザークの隣でディアツカが困った顔をしながら、無言でオレに向かい両手を合わせて頭を下げて謝っている姿を見ると、毒気を抜かれてしまい強く出る気がしない。

イザークはイザークで言葉に詰まり、泡を食っている様にしか見

えないので訳が分からない。

（しかし、気にせいでなく、イザークに懐かれてるような気がするが何故に？）

全く心当たりが無い訳ではないが、いまひとつ腑に落ちないのも事実ではある。

ただ、打算などではなく、アスラン、ニコル、イザーク、ディアツカの4人からは、兄貴分として認めてもらえれば、と、考えているオレにとつて、イザークとディアツカの今回の行動は別段咎めるべき物ではなく、むしろありがたいものであった。

「まあいい。ほら、行くぞイザーク。ディアツカもだ。」

苦笑しつつ2人にそう告げると、先にブリーフィングルームに向かい通路を進む。

慌てて後を追って来つつも何やら口論している2人の声を背後に聴きながら、窓に写るサングラスを掛けた自分に心の中で問いかけた。

オレはクルーゼだが、いや、クルーゼとして、この様に生きて往くのも『アリ』なんじゃないか、と……。

第2話

ヘリオポリスへの被害は可能な限り少なくする。

今回のG奪取作戦の一つのキモがコレであった。

現在のオーブは、この戦争が始まる前からの政治工作等により、（原作と同じく）中立の立場を取りつつもプラントに好意的であり、マストライバーを使った食糧支援が秘かに行われている程なのだ。当然オーブにも地球連合寄りの人間は存在しており、彼らを勢い付けさせる必要はプラントには全くない。

それよりむしろ、ヘリオポリスで連合のモビルスーツが造られている証拠である5機のGを奪う事で、連合寄りの人間を失脚させて排除する。

ザラ議長も当然その辺りまで考えて、やり過ぎない様にと釘をさしつつもこの作戦にGOサインを出したのである。

「メビウスを前面に出して時間を稼げ！ G兵器の搬入を急がせろ。機体だけでもいい、最優先だ！」

「ここは危険です！ 指揮ならアークエンジェルで……」

しかし次の瞬間、シグーからの攻撃で吹き飛ばされる管制室。

この攻撃でほとんどの上級指揮官が命を落とす事となり、混乱に拍車がかかる事となった。

だが、攻撃したシグーのパイロットは実に不機嫌そうにつぶやいた。

「フン！ 他愛もない。メビウス程度でジンを止めれる訳ないだろーに。まだ学習しないのか？」

そして、気持ちを切り替える様に頭を左右に振ると、命令した。

「このまま港湾施設に突入する！ B・C小隊は残った雑魚メビウスの掃討後、コロニーに突入しろ。」

返事を聞くのももどかしげに、シグーはコロニー内に突入するのだった。

コロニー内では重火器が使えない以上、偵察とスパイによる監視の強化、突入時に相手の混乱を助長させる為に、徹底したジャミングを行う事と煙幕を使用する事。

そして艦艇とモビルスーツによる大規模な陽動と牽制を行なう事。ヴェサリウスを筆頭にした艦艇とモビルスーツによるコロニー近辺でのハデな威嚇行動に、地球連合の将官クラスは完全に気を取られてしまい、コロニー内部は非常に手薄になっていた。

そのため反撃は散発的で、コロニー内での戦闘ではこちらが一方的に押しまくっている。

(このスピードで推移すればキラ・ヤマト一行が港湾施設に辿り着く前に、撤収も可能なのでは……)

結果的に見れば、ほんの少しとはいえスキがあったと言う事なの

だろう。

それに気が付いた時、オレは無意識にバイザーを上げていた。

「それにツ！！　のるなあアアツ！！！！」

そう怒声を上げるのが先だったか？　それとも駆け出すのが先だったか？

Gのそばの人影を牽制するように右手の拳銃を振りかざしながら、しかし狙いをつける事無く、オレは突貫した。

（小柄で私服っぽいのは間違いなくキラ・ヤマトのハズだツ！
ここでストライクに乗られると！！）

「大事にさわるツ！！！！」

その横にツナギ姿の人影が確認できるが、煙幕のせいで誰か判別できない。

原作ならマリユール・ラミアスだが、彼女ではないのか銃を持っていない。

技術者なのかこちらを見て固まっているのを見て、勝機を見出したオレは2人に肉薄した。

（シルエットからするとオンナか？　武装していないとは迂闊だなッ！！）

とつさにキラを庇おうとしているらしい女性の首筋に、左手で手刀を叩き込み態勢が崩れたところを蹴り飛ばそうとしたのだが、予想外な事が起きてしまった。

ストライクのコクピット周辺で足場が不安定な事と、周囲での爆発による振動が重なってしまい、蹴りを出すタイミングが半瞬遅れ

てしまったのだ。

その半瞬で反撃される事はなかったが、代わりにと言っか気を失ってしまったらしい女性が、キラともつれる様にしてストライクのコクピットに落ちてしまったのだ。

（修正力にも程があるだろうが！　って、ええい、考えているヒマは無いッ！）

そしてオレも間髪入れず、ストライクのコクピットに飛び込むのだった。

「クルーゼ隊長ッ！！」

クルーゼから譲られたシグーのコクピットで、ラストイーは思わず声を上げてしまった。

この作戦の後プラントに戻ると、彼はクルーゼ隊を離れヤキン・ドゥーエ防衛部隊への転属が決定している。

部隊に残留を希望する旨の上申書を提出したものの効果は無く、落ち込んでいた彼にクルーゼが提案したのが、今回の作戦でシグーに乗りジンに指示を出しつつ強襲部隊を援護する事だった。

「早晚部隊を率いる事になるんだ。シグーと指示を出す事、両方に慣れておいて困る事はないだろう。」

ラストティーがこの作戦で失うには惜しい人材である事と、モビルスーツによる攻撃を強化したいとの思惑を持っているクルーゼにとって、彼は適任だったのだ。

（クソツ、どうする？ そばに降りて援護したいのは山々だが、強襲部隊が撤収しようかと言うタイミング、上空からの援護に穴ができると人的被害が出る恐れが高い。）

相変わらず散発的な攻撃しかしてこない連合軍に牽制をしながら判断に迷ったラストティーだったが、クルーゼの飛び込んだモビルスーツから通信が入り安堵する事となった。

『クルーゼだ。モビルスーツの奪取に成功した。ラストティー！
部隊の護衛をしつつ帰投しろ。』

ストライクのコクピットに飛び込んだオレが見たのは、シートの上裏まで落下し気を失っている女性と、その下敷きとなり意識はあるものの混乱して固まっているキラ・ヤマトであった。

「この状況で信じると言うのが酷なのは判っているが、危害を加える気は全くない。悪いが、そのままその女性を抱えていてくれな
いか。」

務めて穏やかな口調で言うと、コクコクと首を上下に振って答え

てくれるキラ。

安堵させる事が出来るとは思わないが微笑みながらキラに向かつてうなづくと、オレはシートに座りギルからもらったディスクを取り出した。

(右下にスリットがあると聞いたが………。これか。)

スリットにディスクを入れると、ほとんどすぐにモバイルスーツが起動した。

キラが書き換える前の地球連合製OSでは、立ち上がるのがやっとなレベルである事は判っていたので、コーディネーター仕様の簡単なOSを強制介入させたのである。

このOSこそがギルが託してくれたディスクの正体であり、他の強襲メンバーにも同じ物を渡してある。

すっかり時限プログラムも仕込んであり、すぐに証拠は無くなる様にできている。

(さっすが、ギルバート・デュランダル！ これでPS装甲を展開しつつヴェサリウスに帰還できる。)

ジンとまではいかないが、メビウス相手なら遅れはとらない程度に機動性も確保されているのを頼もしく思いながら、オレは帰還の途についた。

後ろから感じるキラ・ヤマトの視線に冷や汗をかきながら。

(……。えらい事になってしまった。でも今更降ろせないもんなあ。どうすりゃいいんだ?)

これが今のオレの嘘偽らざる本音だった。

そしてヴェサリウスに帰還したオレだが、（キラがGに乗るのを阻止する為なんて、誰にも言えないからとはいえ）突然突貫した事を、

『無理・無茶をするなど厳命した人間が、一番ソレをしてどうするんですかっ!!』

と、会う人会う人全てに言われる事になったのは関係のない事だ
と思いたい。

第2話（後書き）

ラストページの転属先がヤキン・ドゥーエ、は独自設定となります、御了承下さい。まあ他にも独自設定テンコ盛りなんで、そこだけ強調するのも何ですが。

しばらくはストックあるので若干の手直し程度で投稿できそうです。が、なくなった後が怖いなぁ。

第3話

「やはり上腕部にもう少し、パワーを回した方が良いと思うんだがな。」

「そう言うけどイザーク、ビームサーベルだからトルクよりスピードだけ上げた方がベターだと思うんだけど。」

「俺もアスランに賛成だな。それに基本、ウチのたいちよーは、射撃でカタをつけるタイプだからな。オレのバスターみたいに、もっと射撃関連にシステム割こーぜ！」

「いきなり話に割り込んでくるなディアツカ。って、ニコルも勝手にスラスターの数値をいじろうとするんじゃない！」

「エー！ ずるいですよ、イザーク。僕も隊長にお願いされてるんですから。それに、この辺の数値はイージスを参考にした方がいいと思うんですけど。」

ああでもないこうでもない、隊長機となったストライクのOSを完成させよう議論している4人だが、こうなったそもそもその発端はクルーゼが、

『自分のモビルスーツのカタが付いたらでいいので、オレの機体も頼む。』

と、誰とは無く告げた後、ノーマルスーツのまま艦橋へ行ってしまった事が原因である。

頼まれた事がよほど嬉しかったらしく、傍目にも判る張り切り様でストライクに群がっている4人なのであった。

「だから勝手にいじるなッ！ 整合性が取れんだらうがッ！」

しかし、ストライクのOSが出来上がるまで、まだ少し掛かりそうな感じではあった。

腕組みをし、スクリーンに写るアークエンジェルを見ながらオレは、アデスと会話をしていた。

「艦長。現在の敵戦艦の様子はどうなっている？」

「ハイ。特に表立った動きは無いようです。張り付いている偵察型ジンからも定時連絡以外には何も……………」

「そうか、将官クラスでどんな人物が生き残っているかによって、こちらの対応も変化するが……………。その誰かが問題だな。正直言って、展開が読めん。押すか、引くか、難しいところだな」

「降伏勧告を出してみるのはいかがでしょう？ 少し時間を与えれば、必ず何らかの反応があると思いますか？」

「そうだな。あまり上に伺いを立てるばかりでは、何のためにオレが居るのか問われかねんしな。」

（鹵獲がベストだが、ことモバイルスーツの運用そのものは、プラントの方が実績もあればシステムのにもこなれていて上だしな。そこは拘らずに破壊してしまっても問題は無いか・・・・・・？）

降伏勧告を出す方向で話がまとまったオレは、一つ思い出した事があり話題を変えた。

「そうそう、少し話が逸れるが敵艦のコードネームを「木馬」にしようと思うんだが、どうだ？」

急に話題が変わり一瞬キョトンとした顔になったアデスだったが、すぐにいつもの顔に戻ると思案げな顔をこちらに向けた。

「トロイヤですか。ギリシャ神話の通りなら連合に勝利をもたらす事になってしまいますが？」

アデスの博識ぶりにオレは眼を細めつつ、笑みを浮かべながら返した。

「トロイの木馬なら、な。だが、こちらの木馬の中身はすでにカラだ。さして問題にはなるまい。」

「・・・なるほど、そう言う事でしたら特に反対する理由はありませんな。以後、あの敵艦を木馬と呼称する事にしましょう。」

「それで頼む。さて・・・・・・、次は奪取したら機のモバイルス

「ツのデータだな。」

「隊長、これが本国に取り急ぎで送る分なのですが……」

どのタイミングで降伏勧告を行うか模索しつつ、オレは隊長としての仕事に忙殺されていた。

（キラの所に行って、何か一声かけたいんだがなあ。今は、頭を打っていないか等のメディカルチェックを受けさせてるから、心配いらないかな？）

一方アークエンジェルの艦内は悪い意味で緊張が高まっていた。アルツ・A・ハイマン少佐は苛立ちを全く隠そうとせず、周りに怒鳴り散らしていた。

「だから月と通信をつなげと言っとなるだろうが！ 貴様！ 通信士のくせにそれができんとぬかすのか！！」

さらに指差しながら、いだかげに告げた。

「戻ったら軍法会議だ！ 首を洗っておけ！！ この役立たずがっ……！！」

そう言うと踵を返しブリッジから出て行くところなので、ナタル・バジルールは慌てて引き止めた。

「どっ、どこへ行かれるのですか？　いつ敵が再度襲ってくるか判らない状況で……」

ナタルが続ける事が出来なかったのは、ハイマン少佐が鬼の形相で彼女を突き飛ばしたからである。

「やかましい！　この新米少尉風情が！」

そこでナタルを改めて見ると、あざける様に言った。

「しかも貴様女か！　生意気にも程があるぞ！　これ以上齒向かうと独房にぶち込むからなっ！」

あまりの言い様に唾然となったナタルを残し、足音高くブリッジから出ていくハイマンであった。

「だ、大丈夫ですか？　少尉。」

そう言いながら助け起こしてくれるダリダに礼を言いながら、ナタルは先の戦闘でみた敵のモビルスーツの特徴を思い出していた。

彼女の記憶が正しければ、あのシグーは『世界樹をへし折った男』と連合内で悪名高いラウ・ル・クルーゼの乗機である。

開戦から今までの彼の戦績を考えると、この艦は【詰んだ】状態にあると考えてまず間違いない。

どうシミュレートしてみても、現状を打破して第8艦隊と合流する方法は思いつけなかった。

(しかもトップがハイマン少佐では。ここから月に通信する事など、不可能だと判らないような人物では……………)

溜息をつくなと言うのが無理な状況で、それでもナタルは気丈にも、ブリッジにいる生き残った部下たちに檄を飛ばそうとしたのだが、それも叶わぬ事となった。

席を外したハイマン少佐が何を思ったのか、舞い戻ってきたのである。

しかも、何やら先ほどまでとは違い上機嫌なのだ。

なぜか不吉な予感がしてしまい、ナタルがハイマンに声を掛けようとしたその時、氣勢を制してハイマンは、通信士に向かって命令した。

「通信回線を開け。敵の旗艦に対してだ。」

この時ハイマンを止められなかった事を、後々までナタルは後悔する事になる。

「……………？ン？クルーゼ隊長!!」

大きめなその一声に、軽い喧騒に包まれていたブリッジが一瞬で静かになった。

「通信が入っています。敵艦、いや木馬からです！！」

「このタイミングでか？」

若干不審に思ったが無視する訳にも行かず、つなぐ様に指示を出したところ、少佐の階級章をつけた人物がスクリーンに映し出された。

「こちらは地球連合の戦艦アークエンジェルである。本艦はこれより10分後、ヘリオポリスより出航する。」

この時、ヴェサリウスの艦内に白けた様な空気が漂ったのは致し方あるまい。

正直オレ自身、この状況で何を言っているのか？ と、思ったのだから。

しかし、少佐の階級章をつけたこの人物は、ここで唇の端を釣り上げると愉快でたまらないと言った表情で続けた。

「なお、本艦の行動を阻害する動きがザフトに見られた場合、ヘリオポリスの安全は保障できない！！ 以上だ。」

一瞬、オレは彼が何を言ったか理解できなかった。

他のブリッジクルーも同じだったらしく、空気が固まっている。

だが、ヤツの言った事の意味が判ると、オレは罵声に近い怒声をあげていた。

「貴様ツ！！ 自分が何を言ったか解っているのかツ！！！！ 軍人が守るべき市民を【楯】にすると公言したんだぞ！！！！！！」

しかしそれに対する反応はないまま、通信は一方的に切られてし

まった。

(なっ、なんてこった！ こんな展開ありか?!)

無意識にコンソールを拳で殴ってしまったが、逆にその痛みがオレを冷静にさせた。

(落ち着けっ！ どうする？ どうすればいい？ クソッ、時間も無い、良い案もない、無い無いづくしか！ こんな時本来のクルーゼならどうす……)

この時、オレの頭の中を天啓にも似た閃きが走り抜けた。

(そうだ、クルーゼなら、より憎しみを煽り混沌とした世界へと持っていく為、ヘリオポリスを崩壊させる事を優先するんじゃないか？ アークエンジェル撃破の優先度は低いハズだ。……、なら、オレのすべき事はその逆と言う事だ。)

そこまで思考すると、覚悟を決めた。

(そうだ、ヘリオポリスを破壊させる訳にはいかない。ヘリオポリス崩壊はオーブとの関係悪化と言う最低な結果しか招かない。独断専行で断罪されるのは受け入れてやる。だが……)

スクリーンのアークエンジェルを睨みつけながら、オレは静かに立ち上がった。

(ヤツのやり方は赦せん!!!)

「アデス艦長。艦内とガモフ、ツィーグラの両艦に通信回線を

つないでくれ。敵に傍受されない様に秘匿回線だ。」

すぐに準備がなされ、オレはマイクを手渡された。

「クルーゼだ。全員そのまま聞いてほしい。」

原作には存在しなかったアークエンジェル攻略戦が今まさに始まるうとしていた。

第3話（後書き）

アルツ・A・ハイマン少佐はオリキャラ設定となります。また、クルーゼの『世界樹をへし折った男』も同様です。世界樹はそのうち過去のエピソードに入れるつもりではありますが、いつになることやら。

実際ヘリオポリスを破壊して遁走するパターンも考えたんですが、私の筆力では収集つかなくなりそうなので止めました。すでに何かとんでもない方向に行っちゃってる気がしますけど、まあそれはそれと言っ事で。

第4話

通信を終え、満足そうにキャプテンシートでにやけていたに苦言を呈したのは、やはりナタルであった。

「どう言っおつもりですか少佐。このような民間人を楯にするやり方、連合内でも非難されるのは必至かと思われませんが。」

かなりきつめの口調で告げたのだが、ハイマンは一向に気にした様子もなく、鼻を鳴らしながら答えた。

「フン。どうせヘリオポリスのほとんどの人間はコーディネーターだ。我々の目指す【青き清浄なる世界】の礎になってもらうのではないか。その為ならコロニーの一つ二つ、そしてそこに住む輩なんぞ問題になるまい。」

さも当然の様に言い放つハイマンに絶句してしまうナタル。

敵であるクルーゼの怒りの方が、理解し共感できる事にやり切れなさを感じてしまい、連合上層部へのブルーコスモスの浸透に恐怖すら覚えてしまうナタルであった。

サングラスを外し、素顔でモニター越しの隊員全てに向かい、オレは語りかけた。

「敵はコロニーの民間人を楯にとり、逃走を謀っている。私はこの様な卑劣な行いを見逃す事はできない。コロニーから出たが最後、間違いなくヘリオポリスを攻撃し破壊、我々が救助活動を行っているその隙に逃走する考えとみて間違いない。」

艦内の緊張が一気に高まるのを感じながら、話を続ける。

「被爆し一時的な放棄を余儀なくされたユニウスセブン以上の悲劇、ヘリオポリス崩壊など起こしてならない！ これはコロニーに生きる我々にとって、絶対に阻止しなければならない事なのだ！」

敵の目的と、こちらの目的が明瞭になった事で、今度は士気が高まっていくのを肌で感じとり、オレはこの作戦の成功を確信した。

「作戦を伝える！」

そう言うと、手を離せない者以外のすべての部下が一斉に直立不動の姿勢を取った。

「ヴェサリウスは現地点に固定。司令塔として木馬の動向を監視し、突入する部隊に状況を逐次連絡せよ。突入はPS装甲を展開できる5機のGにて行う。密集隊形で一気にヘリオポリスへと強行突

入、木馬の息の根を止める！ ガモフはコロニーの北へ移動、モビルスーツと共に港を封鎖。ツィーグラールは対面の南へ移動し同様に港を封鎖せよ。」

「作戦開始は90秒後、ストライクの射出と同時に僚艦は行動を開始せよ！」

「……………以上だ。クルーゼ隊みな働きに期待する。」

通達を終えるとオレはすぐに踵を返し、モビルスーツデッキに向かおうとした。

「……クルーゼ隊長っ！！！！！！！！！！」

しかし、突然アデス以下のクルー全員に呼び止められた為、オレは何事かと振り返った。

「……御武運を！！！！！！！！！！」

そう言つのと同時に敬礼をしてくるブリッジのクルー一同に感極まるのと同時に、今までの行動が、決して間違っただけではなかったのだと勇気づけられた。

「……………あとを頼む。」

万感の思いを籠めて彼らに敬礼を返すと、オレはモビルスーツデ
ッキへと向かうのだった。

ディアツカは出撃準備が整ったバスターのコクピットの中で待機
しながら、サブスクリーンに映っているイザークを、感心した面持
ちで眺めていた。

（少し前なら、連合のあんな発言を聞いた後のイザークは宥める
のが大変だったと思うんだよなあ……………、変われば変わると
言うか、最も俺やアスラン、ニコルもおんなじか。）

「どうしたディアツカ？ 緊張してるのか？」

ディアツカの視線に気が付いたのか、そう声を掛けてくるイザ
ークの声は穏やかと言っても良いほど静かなものだった。

「い、いや〜、そんな事はねーんだけど。えらく落ち着いてると思ってる。」

いつもの軽い感じでニヤリと笑いながら返すディアツカに、少し表情を緩めながらイザークは答えた。

「確かに昔なら、頭にきて暴走していた気がするな。」

そう言った後、そんな自分を想像したのか苦笑するイザーク。

「そうですね。以前なら【あの連合士官は赦せない！！】とか、怒鳴っていても少しも不思議じゃなかったですね。」

シレっとした顔で割り込んできたニコルの発言に、有り得た話だけに顔を引き攣らせつつ、何も言い返せないイザーク。

微妙な雰囲気になりかけてしまい、それを救おうと思ったのかアスランが言った。

「ま、まあ、いくら本当の事とは言え、あんまりハッキリ言ってもんじゃないと思うよ、ニコル。」

「……………」

三人から冷たい視線を浴びせられ、失言だったかと焦るアスランだったが、それを救ってくれたのは他ならぬクルーゼだった。

「緊張してないのは良い傾向だな。」

クルーゼ隊長は、困った時にいつも助けしてくれるんだと、嬉しそうにアスランが言うようになったのは、この時からだと後にニコルは語っている。

会話を中断させてしまい、気まずい雰囲気にならしてしまおうかと思っただが、何故かホツとしたような空気が漂っている。

「奪取したモビルスーツに搭乗しているのが運のつきだ。せいぜいシツカリ付いてくることだ。」

気を引き締め様と嫌味な感じで言ったのだが、何故か4人共は気にした様子がなく、嬉しそうな顔をしているので、なにか発言を間違ってしまったのかと、逆にこちらの方が不安になってしまった。

「……大丈夫ですクルーゼ隊長。お供させて頂きます！」

異口同音にそう言われては、鷹揚に頷く以外取れる態度が無かった。

随分遅くなったものだと、思わず感傷的になってしまったのも事実ではあった。

『発艦30秒前。ストライクはカタパルトへ！』

カウントダウンが進む中、ディスプレイに反射して写る自分に、いつもの様に言い聞かせた。

（オレはラウ・ル・クルーゼだ。こんな所で終わったりしない！）

ディスプレイの自分に右手でサムズアップしてみせると、バイザーを下げた。

『5・4・3・・・』

淡々と進むカウントダウンに気を取り直すと、息を一つ吸い込み、オレは操縦桿を握り直した。

「ラウ・ル・クルーゼ、ストライク出るぞ！」

声と同時にGを受け、オレとストライクは宇宙へ飛び出した。

「イザーク・ジュール、デュエル出るぞ！」

「ディアッカ・エルスマン、バスター行くぜ！」

「ニコル・アマルフィ、ブリッツ行きます！」

「アスラン・ザラ、イー吉斯出る！」

ストライクに続き射出された4機のモビルスーツと共に密集隊形を取ると、再度ブーストで加速しヘリオポリスへと肉薄した。

『今だ木馬から、こちらの動きに対する反応はありません！』

(時間との勝負だ。主砲を一発撃たれるのは止められないにしても………)

偵察機からリアルタイムで送られてくるアークエンジェルを睨み

つけ、改めて決心した。

(一発目を撃つ前に必ず沈めてやる!!--!!)

第4話（後書き）

ブリッジクルーの敬礼シーンは、結構入れ込んでしまいました。そんなシーンは読者受けが宜しくないのが常なのですが、如何だったでしょうか？

少しニコルの性格が変わってしまったなあと自分では思いますが、会話でキャラ付けするとニコルの立ち位置がこうなってしまったと言っ感じます。

後、五人の出撃時のセリフはこんなだったかなあ〜と言っ訳で、正直適当です、すみません。

第5話

時間はクルーゼがストライクと共に射出されるほんの少しだけ前に遡る。

最初に異変に気付いたのはCIC電子戦担当のダリダであった。

「ン？ 敵艦隊に動きがみられ……！！ ジャミングです。レーダーが使用不能になりました！！ 恐らくですが、偵察機からの妨害電波と思われます！！ 一瞬ですが敵艦隊に動きが見られました！」

その報告に殺気立つブリッジクルーだったが、当然、一番反応したのはハイマン少佐だった。

「おのれ……、コーディネーター風情が。私が躊躇うとも思っただか！」

そう言ってキャプテンシートに座り直すと、正面を見据えて言い放った。

「主砲発射だ！ とにかくコロニーに直撃させればいい！ うて

い！！」

すぐさま発射シーケンスに入ると思われたが、CIC担当のジャッキー・トノムラは困惑した表情で発言を躊躇っている感じがあった。

しかしそんな逡巡をハイマンが許容できるはずもなく、緊張が限界にきていたのか血走った目で彼を睨みつけると、銃を向けながら怒声をあげた。

「なぜ打たん！！ 命令違反の罪で銃殺されたいかつ！！」

身の危険を感じたトノムラは、ハイマンに正直に事実を伝える事にした。

「ゴッドフリートは使用できません。厳密に言うと現状では8割以上の兵装が使用不可能です。」

伝えられた事実をハイマンはすぐに理解する事ができなかった。

「……………？ どう、ど、ど、どう言う事、なのだ？」

あえぐ様に理由を問う事が出来たのは、彼にしては上出来だったと言えたかもしれない。

しかし、銃を向けられているトノムラとしては、とてもそこまで観察する余裕はなく、つとめて冷静に現状を報告する事にした。

下手に刺激すれば、はずみで引き金を引いてしまふと感じてしまふほどに、今のハイマンには余裕がないのが見て取れたからである。

「ゴッドフリートもローエングリンもエンジン出力が最低でも80パーセント以上なければ使用できません。しかし、現在

は艦内の生命維持に必要な電力を供給する発電機としてしか使用していません。アイドリングで13パーセント程度の出力しかでないのが現状です。」

そして不本意ながら、ハイマンにとって止めとなる一言を告げた。

「現段階からエンジンの出力を80パーセント以上にまで引き上げるには最低でも3分は必要です。そしてそこからゴッドフリートの発射態勢が整うまでさらに2分弱の時間が必要です……」

トノムラによる状況報告が終わると、艦内はとてつもなく重たい沈黙に包まれた。

打つ手がない

ブリッジのクルー全員が理解してしまったのだ、この艦の運命は風前のともし火である、と言う事に。

永遠に沈黙が続いてしまふかと思われたが、回復したレーダーがそれを打ち破った。

しかし、レーダーが指し示す事実には更にクルー達を打ちのめした。

「ジツG兵器です！！ 敵は奪った5機のG兵器のみを出撃させています。接触推定時間ツ48秒後！！」

「又ツ……………、グググツ！」

歯を食いしばり、肘掛けを壊れんばかりの握力で握りしめながら、それでもハイマンは命令を下した。

「……………撃て……………」

呻き声と共に発せられたそれはあまりに小さく、トノムラは思わず復唱ではなく聞き返してしまった。

しかしそれは限界にきていたハイマンの精神の均衡を壊してしまう事となった。

「使える武器はあるのだろうか？！ ミサイルでも機銃でも何でもいい！！ とにかくコロニーを撃つのだツ！！」

そこまで言った後、落ち着いて座っている事が出来なくなったのか、立ち上がると両手を広げ、まるで舞台に立った俳優が歌うように言葉を紡いだ。

「そうだ！ 撃てばいいのだ、コロニーを的に撃てばいいのだ！ そうすればコーディネーターは死に、青き清浄なる世界へまた一歩近づく事が出来るのだ！」

眼は血走り、口から泡を吐きながら、恍惚の表情となるハイマン。

「フハハハハ！ そうともコーディネーターは皆殺しだ！ アズラエルさまっ！ ハイマンはやりませー！！！！」

愉快でたまらないと言った表情のハイマンの狂気に当てられ、啞然と見る事しかできなくなったクルー達だったが、たった一人冷静さを保ち、彼の前に立った女性がいた。

「……………もう、おやめ下さい。」

その声は静かで決して大きなものではなかった。

そして彼女の毅然とした態度が乗り移った言霊は凜としてブリッジの中に響き渡り、ハイマンから噴き出す瘴気を一掃した。

しかし、残念ながらハイマンの狂気を止めるまでには至らなかった。

「なんだと？」

鬼気迫るではなく鬼の形相で睨みつけてくるハイマンに少しも臆することなく、ナタルは意見を述べた。

「まだお解りにならないのですか。勝敗はすでに決めたのです。これ以上無駄な死者と損害を出さない様にするのが、指揮官であるあなたの務めではないのですか？」

真摯なその態度と発言は、相手が正常な思考状態の時であれば正しく評価されたであろうが、今のハイマンに対しては逆効果でしか

なかった。

「ふざけるな!! なぜこの私がザフトなんぞに恥を忍んで降伏せねばならっ……!!」

激高しかかったハイマンだったが、何かに気が付いたのか、嘲りの表情を浮かべると、ゆっくりと銃口をナタルに向けた。

「降伏しろなど言うとは、貴様、さてはザフトのスパイだな。スパイは発見次第銃殺だ。」

そう言われて銃口を向けられても、一向に怯む気配を見せずにナタルは言葉を続けた。

「その銃で私を撃つのですか？ 確かに、私を殺す事は出来るでしょう。しかし、その銃は決して本当の敵には届きません。それでも私を撃つと言うのであれば、そうすれば良いでしょう。指揮官はあなたなのですから。」

そう告げると、静かにハイマンと向き合うナタル。

対照的にハイマンの顔は紅潮し、あえぐ様に荒い呼吸をしている。そして状況の変化は、時間的猶予を与えてはくれなかった。

「G兵器が港に突入してきましたっ！ 接触まであと23秒っ！

「！」

「みつ、認めんぞっ！ 断じて、断じて降伏などしなっつ……

……！」

銃を持つ手も震えだし、顔から脂汗を滴らせながらも言葉を続けようとしたハイマンだったが、さらに呼吸が荒くなっていく。

あまりに具合の悪そうな表情と荒くなりすぎた呼吸に、不安になったナタルが声をかけようとしたまさにその時、ハイマンは崩れ落ちる様に倒れこんでしまった。

床に落ちた拳銃が乾いた音を響かせる中、駆け寄ったナタルが見たのは、泡を吹きながら痙攣し、気絶しているハイマンの姿だった。あまりの緊張に精神が耐えられなくなったのだ。

「直ぐにドクターを！ それと大至急オープンチャンネルでザフトに降伏する旨を伝える！ 急げ！！ 相手は待ってくれないぞっ！！」

気を取り直したナタルの指示で、一斉に動き出すクルー達。

『こちらアーケエンジェル！ ザフトと接近するモビルスーツに告げる！ 本艦に交戦の意思なし！ 降伏するので戦闘を停止されし。繰り返す、降伏するので戦闘を停止されし。』

これで戦闘は終結する、安堵しかけたナタルとクルー達だったが、次の瞬間、驚愕に表情が凍りついた。

艦内に敵からのロックオンアラートが、けたたましく鳴り響いたのだ。

「G兵器からのロックオンです！！ ザフトは戦闘を止める気配がありませんっ！！」

悲鳴のような声での報告を聞き、ナタルは絶望感に捕われそうになった。

（先の通信ですら、時間稼ぎの企みだと思われるのか？ もしそうなら最早打つ手はない……）

そんな混乱のさなかにあるアークエンジェルのブリッジの横を駆け抜けていく一機のモビルスーツ。

（あのG兵器は！？）

目の前でターンをかけ、ブリッジの高さでホバリングしながらビームライフルを構えるストライク。

それを見たナタルの脳裏になぜか衝撃が走った。

（まさか！ 敵が戦闘を止めない理由は！）

最後の望みを掛け、ナタルはマイクを手に取った。

第5話（後書き）

アークエンジェルの各兵装の使用条件は独自設定となります。
御了承下さい。

そして、あっさりハイマン退場。
流石に上官をブン殴ったりして、強制退場させられないもんなあ。

第6話

『クルーゼ隊長！ 敵から降伏すると通信が！』

「止まるなイザークツ！ アデス！ エンジンは？ 敵の機関は停止しているのか？」

『停止は確認できません！ 今だ稼働中です！』

「降伏する気があるなら機関停止が戦場の習いだ！ 無視してかまわん！！ 戦闘を継続しろ！！」

モニター越しのイザークは、苦い薬を無理やり飲まされたみたいな顔をしている。

彼にしてみれば、降伏すると言ってきた相手を攻撃するのは躊躇われる行為なのだろう。

気持は理解できる、しかし、手順を踏まない連合が悪いと割り切った指揮を出さねば、やられるのはこちらかもしれないのだ。

「木馬を視認した！ 各機散開！！ ロックオン後、指示を待てる！」

「了解！！」

命令一過、アークエンジェルの至近で展開する他のGを視界の端

に捕らえつつ、オレは艦橋を掠める様に飛び、その正面でライフルを構えた。

（まさかオレ自身が、アークエンジェルを沈める事になるとはな。）

感慨深いものが無きにしても非ずだが、浸ったばかりに主砲を撃たれては意味が無い。

「これで終わりだ。」

攻撃命令を出そうとした正にその時、アークエンジェルが再度オーブンチャンネルで呼びかけてきた。

『本艦はたった今機関を停止させた！ 改めてザフトに申し入れる、投降するので戦闘を停止されたし。繰り返す、投降するので戦闘を停止されたし！』

『クルーゼ隊長！！ 機関の停止を確認しましたッ！』

オレが確認を取るより早く、アデスから通信が飛び込んで来た。サブモニターに映るイザークとアスランがあからさまにホツとした表情をしている事に、内心苦笑してしまうが、そんな感じは微塵も見せない様に気をつけて、オレは戦闘の終了を宣言した。

「クルーゼ隊の全将兵に到達する。現時刻をもって木馬攻略戦を

終了する。」

明らかに周りの雰囲気は軽くなるのを感じながら、気を引き締める様に続けた。

「アデス、木馬の武装解除を行う。陸戦隊の編成を頼む。ラストイー、出せるモビルスーツは全て出し、港湾に残るコンテナで、回収できそうな物は可能な限り回収しろ。急げよ、余り時間は取れんぞ。5機のGは、暫く周りを哨戒する。」

告げるべき事を告げ終わり、オレはようやく息をひとつ、大きく吐き出した。

（本当に間一髪と言うやつか。最後の通信は女性の声だったな。それがナタル・バジールだったとしたら、よく気が付いたものだ。本当に優秀だな。しかし、その性格を鑑みれば味方にするのは不可能に近い……か。）

残念だがこればかりはオレが如何こう出来る類のものではない。

（5機のガンダムばかりかアークエンジェルも手に入れた。更にキラ・ヤマトも民間人のまま手中にある。これ以上は、欲のかき過ぎと言つものだな。）

開放されたアークエンジェルのカタパルトデッキに、陸戦隊を乗せた揚陸艇が着艦するのを眺めながら、オレは今回の行動を振り返った。

（しかし変わりにと言うか、今後の展開は全く読めなくなったな。プラントに戻ったら一度、詰める必要があるそうだ。）

こうして考えをまとめていると、捕虜となったアークエンジェルのクルー全員が、カタパルトデッキに集められたのが見て取れた為、オレは隊長としてその場に赴く事にした。

「イザーク、他の3人をまとめ、引き続き哨戒をたのむぞ。」

『ハイ！　ありがとう・・・・・・・・、いえ、申し訳ありません。お任せ下さい！』

何に対して礼を言おうとしたのやらと思いつながら、オレはストライクを移動させることにした。

（・・・・・・・・良い腕してんなあ。単純にソフトの差で片付けられんぜ。うちのヒヨッコ共は真っ直ぐ立つのにも四苦八苦してたからなあ。）

人が着地すると言うよりも、鳥が舞い降りるかの様に静かに着艦するストライクを見て、コジロー・マードックはそんな感想を持った。

（おっと、感心してないでこれからどうなるのか考えないとな。って、考えてもしょうがないのか？ なる様にしかならんもんなあ。）

自分が捕虜である事を思い出し、頭をボリボリと掻きながら苦笑してしまっコジロー。

そして自分の周りを見渡すと全てのクルーが不安と恐怖がないまぜになった顔をして、へたりこんでいる。

しかしそんな状況の中、ただ一人毅然とした様子で立っているクルーがいる事に気がついた。

（あれは……ブリッジ要員の新米少尉さんだったか？
女だてらにこの状況で大したモンだ。）

うしろ姿だった為、その表情まで窺い知る事は出来なかったコジローは毅然とした態度と評したが、実際のナタルは穏やかな顔をしていた。

（妙な感覚だ。敵の捕虜となつてしまったと言うのに、安堵している自分がある。噂程度とはいえ、ラウ・ル・クルーゼの人となりを知っているせいだろうか？）

緊張こそしているものの不安を感じていない自身の心を不思議に思いつつ、ストライクを見つめるナタル。

ストライクから降り立ったクルーゼの元に駆けつけ、状況報告をしていると思われる若い兵士の顔が紅潮しているのが見て取れる。

そして最後にクルーゼから何がしかの言葉を掛けられたその兵士が嬉しそうに敬礼している姿を見ると、彼が部下からどれだけ慕われているかが判り、自分の境遇を鑑みて気落ちしてしまうナタル。

（私にも尊敬してついていく事が出来る上官がいれば……………）

そんなナタルの葛藤も、クルーゼが近づいてきた事で中断を余儀なくされる。

「ナタル・バジルール以下35名、ラウル・ル・クルーゼ中佐にその身をお預けいたします。どうか部下達には寛大な処置をお願い致します。」

よく通る声でそう口上を述べるナタルに対して、微笑を浮かべながらクルーゼは告げた。

「貴官らの事はこのラウル・ル・クルーゼがお引き受けします。どうか私を信用して頂きたい。無碍に扱う様な事はしないと約束します。」

紳士的な対応に内心感動しているナタルに、クルーゼは極々自然に話しかけた。

「その声は……………。最後の呼びかけは貴官のものでしたか。」

「はっ、はい。なにぶんとっさの事でしたので……………」

不手際があつたのかと不安げな表情になった彼女がクルーゼをみると、それまでとは打って変わり彼は真剣な表情をしている。

「いえ、無駄な戦闘を行い必要のない死者を出さずに済みました。」

更に、このコロニーをこれ以上戦禍に巻き込む事なく済んだのも貴官の判断のお陰です。」

そして教本通りの綺麗な敬礼をナタルに向けるクルーゼ。

反射的に敬礼を返したナタルは、この後クルーゼが発した言葉を生涯忘れる事はなかった。

「ありがとう。」

そしてクルーゼはそばに控えていた軍曹に捕虜への対応を任せ、ナタルの元から去っていくのだった。

ナタルとの邂逅を終わらせたオレは、陸戦隊の兵士に呼び止められる事となった。

「クルーゼ隊長！」

少し困ったような表情をしているので、問題が発生したのだろう。

「どうした？」

彼はオレのそばまで来ると、敬礼の後、直立不動で現状を報告し

始めた。

「………？ 民間人………。彼らはそう言っているのか。」

「はい。ヘリオポリス在住のカレッジ生なのですぐに解放しろ、と言ってききません。IDカードを持ってはいますが………。」

「そう言った後、言いずらそうにしているのでオレは彼の言葉を継いだ。」

「今の状況では確認もままならんわな。逃げ遅れた結果、選りにも選ってこの船に逃げ込むとは………。」

「申し訳ありません。どうにも手に負えませんで………。」
本当に恐縮している兵士を見ると、気の毒になってきた。

「会うだけは会おう。それで向こうが納得するかどうかは別問題だが。」

「ありがとうございます！ こちらです。」

本当に嬉しそうに礼を言った後、案内を始めた彼の後についていく事にする。

(これだけ喜ぶとは。どれだけ困らせられたか判ると言うものだ。

少し用心しておくか………。)

どうやらそのグループは、地球連合の兵士たちとは別にされ、少し離れた場所で固められている。

近づいて行きながら観察すると、確かに服装はカレッジの学生らしくカジユアルな格好だが、それだけで民間人と判断して開放する事は当然ながらできない。

そして、オレに気が付いた他の兵士が敬礼をする一瞬のスキをついて、一人の少女がこちらに向かって駆け出してきた。

「兄さん！ ラウ兄さんでしょ?!」

このセリフに兵士達は固まってしまい、全く対処できないでいる。かく言うオレ自身もこのトンでも発言に不意をつかれ、指示を出す事が出来なかった。

誰も動く事が出来ない完璧に空白な一瞬が発生し、そのお陰で少女は誰に遮られる事もなくオレのふところに飛び込む事に成功した。ギョツ、と言う音が聞こえそうな感じでオレに抱きついてきた少女からは殺気を感じる事はないし、その発言もえらく気になるしで、取りあえず様子を見ることにした。

(上品な感じのワンピースに紅いロングヘア、良いところのお嬢様な雰囲気だな。ン？ 何故か少し離れた所に居るメガネから視線を感じるが。ああ、カレシなのかな？ しかし、本当に誰だこの女の口?)

ここで彼女の髪を留めているアクセサリーに眼が行ったオレは、それに見覚えがある事に気が付いた。

(アッ！ そう言えばコレ、誕生日か何かでねだられ買った覚え

が………って)

「フレイか？」

思わず声に出た名前を聞いた彼女は、腕に更に力をこめてしがみ付いてきた。

「思い出してくれた？ 兄さん。」

そう言った後、嬉しそうに見あげてくるフレイに曖昧な返事をしながらオレは頭を抱えなくなった。

(忘れてた。キラの仲間達もシエルターに避難できないでいたんだ。しかもフレイって、ジョージ・アルスターの大事な一人娘じゃないか。ここでザフトが保護してしまうと、いろんな意味でヤバくないか？ それに、オレこんなに懐かれている覚えがないんだが………)

コクピット越しに何故か非難がましい視線を投げかけてくるイザークとアスランの態度に疑問を覚えつつ、増え続ける厄介事に頭痛がしてくるオレだった。

(とりあえず、どう收拾つけるかなあ。)

第6話（後書き）

ザフトに階級があるのは独自設定となります。今後の展開上必要
と
思
っ
て
の
処
置
で
す
の
で
あ
し
か
ら
ず
。
ア
ー
ク
エ
ン
ジ
エ
ル
の
捕
虜
の
人
数
も
正
直
テ
キ
ト
ー
で
す
。
悩
ん
だ
け
れ
ど
ラ
ス
ト
で
フ
レ
イ
登
場
。
出
し
た
以
上
、
そ
れ
な
り
に
キ
ー
と
な
る
キ
ャ
ラ
の
予
定
な
の
で
、
が
ん
ば
っ
て
活
躍
し
て
ほ
し
い
と
こ
ろ
で
す
。

それでは、また次回お会いしましょうー。

第7話

『……中立宣言をしたオーブのコロニーで発覚した今回の事件に対し、ザラ議長は現オーブ政権に対して強い懸念と不快感を表明しています。しかし、攻撃を行ったクルーゼ中佐に対してもやりすぎではないかとの批判が出ており、プラントはこの一連の事件への対応に慎重な姿勢が求められると……』

(まあ今回の件についての報道はこんな所か。後はクルーゼが少佐に降格し、クルーゼ隊は解散。これで表向きの火消は終了だな。)

手元の書類を繰りながらそんな感想を持つプラント議長。パトリック・ザラ。

(しかし、ザフトに階級を導入するよう執拗に迫ったクルーゼが一番懲罰人事で降格しているな。今回で何度目だ？ 降格するのは?)

最もその度手柄を立てて再度昇格しているが、本来なら当の昔に将官クラスになっているはずである。

降格する事で、ザフト内での風当たりを意図的に弱めているのではないかとパトリックは思っているが、確認するほどの事でもない。なので真相は不明である。

（そして早速オーブからは、プラントに調査委員の一団がやってくる。あまり地球連合ばかり叩くと反感を買う事になる分、プラントも批判しているとの政治的なスタンスは取る必要があるからな）

そして調査委員の団長とその随員のリストを確認していたパトリックは、愉快そうに口の端を少し釣り上げた。

（ユウナ・ロマ・セイランを団長に、ギルバート・デュランダルが随員の一人とはな。・・・ウナトめ、これを機にユウナを前面に押し出す腹か。しかも亡命者であるデュランダルを派遣する事で、こちらの懐の深さも計ると言った塩梅か、喰えん奴だ。）

あごに右手をやりながら更に思考を進めるパトリック。

（しかし、これはプラントにとって悪い話ではない。ユウナはプラント寄りと言われているから、アスハのじゃじゃ馬なんぞより、よほど期待値は大きい。今回の騒動でウズミもあまり表には出る事が出来ない分、貸しを作るには良い機会か。）

大雑把にまとめるとパトリックは小さく息を吐き出した。

（唯一気に入らないのは、ユウナもギルバートもクルーゼの知己という点だな。全く、アヤツの知り合いは妙にあくの強いのが揃っていて、対応に苦慮させられる。）

そう思いつつも、クツクツと満足げな笑いをこぼすパトリック。

（ま、彼奴等の相手はクルーゼにさせるさ。表向きは調査委員の一団だが、実務的には通商条約を改定し、同盟一步手前まで話を進

める事になるだろうしな。)

執務室を出ようと椅子から立ち上がりかけた彼は、流れている報道に驚愕する事になる。

『プラントの歌姫ラクス・クライン嬢が慰霊祭の為、現在放棄されているユニウスセブンにむけて出発したとのニュースが……』

「馬鹿なっ！ なぜそれが流れる！！ 軍事機密とまではいかんが、それなりに機密度の高い情報だと言うのに。誰だ！ リークさせたのはっ？」

慌ててデスクの受話器を手に取ると、相手が出るのももどかしげに話したした。

「私だ。 そうだ、大至急ニュースソースの裏を取れ！ 相手がいねたら私の名前を出してかまわん！」

取り急ぎ指令を出した後、深々と椅子に腰かけ顔を両手で覆うパトリック。

(なんてことだ。彼女にもしもがあれば、ザラ派の工作と痛くもない腹を探られ……)

(ウン？ 妙だな。確かに疑われやすいのはザラ派だが、今はそ

ここまでクライン派との確執が無いのは周知のハズだが……。

思索を進める彼の顔つきが厳しいものになっていく。

（まさか、彼女自身が流したのではあるまいな？ 最近露出が減っていたのは事実だが……。裏取り次第では注意が必要になるかもしれない。）

そして彼は厳しい顔のまま席を立ち、執務室を後にするのだった。

眼下に広がる青い地球を眺めながら、ギルバート・デュランダルは今の自分の境遇を感慨深く振り返っていた。

（タリアと共にオーブに亡命して、早3年か。この様な形でプラントに戻る事になるとは考えもしなかったな……。）

最も、クルーゼに言わせると単なる駆け落ちだ、と、ニヤニヤ笑いながら返されるだけなのが癪にさわる所ではある。

（まあ、駆け落ちの方がしっくりくるのは否めないがね。）

なまじ自覚がある為、微苦笑してしまったデュランダルに、頃合いと見たのか隣に座るユウナが話しかけてきた。

「どうしたんです？ 先ほどからにやけてみたり、しかめっ面したり。見ている分には楽しいですが。」

手元のサングラスを器用にクルクル回しながら問うてくるユウナに、先ほどとは違う苦笑を浮かべながらデュランダルは告げた。

「いや、すまないね。どうにも悪友の顔が、先ほどからちらついで離れてくれなくてね。」

ユウナも自身の身を振り返り、納得の表情を浮かべた。

「……悪友ですか。僕にとっては師匠と呼べる人ですけど、そう呼んだら嫌そうな顔をするのでしょうか。」

教導を受けていた時と違い、今は心から感謝しているんですがと、こちらも苦笑を浮かべながら続けるユウナ。

「今回は調査委員としての仕事がメインではありますが、プラントでの”個人的”な最大の目的は、クルーゼさんに仲人を頼む事にあるんですけどね。」

「出発前にも聞いたが本気かね？ 結婚していない彼に頼む時点で、どう見積もっても歩の悪い賭けになってしまおうと思うのだが……」

首をかしげながら告げるデュランダルに、悪戯が成功した子供の

様な笑顔でユウナは言った。

「いえ、実は仲人を取り下げの事を条件に、結婚式への参加を確約してもらうのが本当の目的です。」

そう言われて破顔一笑、デュランダルは愉快そうに告げた。

「それはいい。教え子に一杯食わされた時にどんな顔をするのか、是非その場に立ち会いたいものだ。」

「後が少し怖い気もしますけどね。」

そう言いつつも笑顔だったユウナは、表情を改めるとデュランダルに話し出した。

「プラントまでのフライトはまだ少し掛かりますし、良い機会だから聞いてもらえませんか？ 僕とクルーゼさんとの邂逅を。」

デュランダルも真顔になると、静かにうなずく事で先を促すのだった。

「かれこれもう5年近く昔の話になるのですが……」

デュランダルがユウナの話を書く体勢に入った頃、ヴェサリウスのクルーゼは、己が関与していない歴史の変化に遭遇していた。

「モルゲンレーテの技術主任？」

「はい。ヘリオポリスのホストコンピューターから入手したデータの中に、一致するものがありました。」

アークエンジェルのクルーのリストと、キラを含めたカレッジ生のリストを確認していたクルーゼの元に、もう一枚追加のリストが舞い込んできた。

それにぎつと目を通した第一声が先のものである。

(マリユー・ラミアスがモルゲンレーテ側の技術主任って事は民間人なのか？ しかもオーブの？ どこで何が起こってそうになったんだ？ オレと彼女は今の今まで全く接点がなかったぞ。つまり、与り知らぬところでも齟齬が出てきている訳か。)

G兵器奪取の戦闘時は煙幕の影響で顔が識別できなかった、ストライクのコクピットでは気を失っていた、そしてヴェサリウス帰還後は医務室に衛生兵が担ぎ込んでいた、等々が重なって、クルーゼは自分が気絶させた人物が誰であったかを、この時点まで知らなかったのである。

(……手加減せずに思いっきり手刀を叩き込んだからなあ。間違いなく心証最悪だな。)

技術主任なら単純にG兵器の事だけでなく、開発の経緯を含めた連合とのやり取りまで知っている可能性が高い。

しかし、プラントもしくはコーディネーターに対してどのような

感情を持っているかが全く分からない状況で、顔を合わすのは危険ともいえた。

（恋人を戦争で失ったりはしてないと思いたいが。逆に失ったからコーディネーター憎しで開発したのか？ それとも単純に仕事だから開発したのか？ まいったな、これは。）

成る様にしか成らないかと半ば諦めの境地で、クルーゼはマリユ
ー・ラミアスと話をする為、医務室に向かう事にした。

そして対面時に更に驚かされる事になるとは、当然知る由もなかったのである。

第8話

「……………そう、ええ判ったわ。すまないけれど、そのままモルゲンレーテの中で情報を集めてちょうだい。主人には私から連絡するわ。」

静かに受話器を置いた後、タリアは気分を変える為、深呼吸を一つした。

（まさかマリユールがG兵器開発の主任をしていたなんて。最近の仕事に打ち込んでいる様子だったから、安心していただけなのに。しかもザフトに兵器ごと捕まって捕虜に……………でも、死なずに済んだだけでも良かったのかしら？）

そして、自宅の窓から不安そうに空を見上げるタリア。

「またラウにいらぬ苦勞を掛けてしまっわね。ギルもそちらに行ってるから、2人でなんとかマリユールを救ってあげて。」

オーブの空は彼女の気持ちとは裏腹に、抜ける様な晴天であった。

ユウナの話が一区切りついた所で、デュランダルは今までの話の要点をまとめる感じで振り返った。

「オーブ基本戦闘訓練所にラウによって放り込まれ、さらにラウ自身が教官として君をしごいた訳か。よく君の父上がそんな無茶を承諾したものだな。」

ウナトの人となりを知るデュランダルだけに、クルーゼがどう言う伝手を使ったにせよ相当に無茶な事をしたのは理解ができた。

「実は訓練初日に教官を買収して父に電話をしたのですが、凄い剣幕で叱責されました。そこでようやく父も本気なのだと判って諦めがついたと言った感じですね。」

ばつが悪そうに続きを話すユウナ。

「それからはおとなしく訓練に参加する以外に道が無かったですね。でもそのお陰で見えていなかったものが見えてきたというか。いろいろ知る事ができたのは事実です。」

興味深げに頷きながら続きを促すデュランダル。

「正直それまでは、オーブの国旗にしても国歌にしても、その……、忠誠心と言つか愛国的なものを感じる事は無かったです。」

苦い顔で心中を吐露するユウナ。

「毎朝国旗に向かい国歌を斉唱し、宣誓をしている内に芽生えてきたというより、周りの影響が随分あったのが正直なところですよ。最初の頃は自分より若い、と言うより幼いと言った方が当てはまる少年が、必死に訓練について行こうとするその様子を理解できなかつた。何が彼をそこまで駆り立てるのか？ さっぱり判りませんでした。」

「でも話をするようになって判ったんです。オーブ国籍を取得して両親を呼ぶ一番の近道が、軍に入る事だと。」

両親は最貧国に分類される国に居ると言っていました、と、付け加えるコウナ。

「その他にも、辛い時やくじけそうになった時に助けてくれるヤツもいました。いまも友人として付き合いが続いている、イイ奴らです。」

その友人の事を思い浮かべたのか笑顔に変わり、話を続けた。

「その時に気がつけたんです。今までの自分には取り巻きはいても友達は一人もいなかったと。」

気付いた時は結構ショックでしたよ、と、笑顔のままにいれるのは既に吹っ切れているからなのだろう。

「でも、その時はクルーゼさんには感謝なんてしてませんでしたね。鬼教官として仲間と一緒に怨嗟の対象にしか、していませんでした。」

そこで一旦言葉を切ると、改まって話を続けるユウナ。

「訓練も終盤に差し掛かったころでした。政治家を志す転機となった事件が起こったのは。」

それは冬の冷たい雨が降りしきる日の夜間行軍訓練中に、偶然目にしたニュース映像だった。

高級リムジンから仕立ての良さそうなスーツに身を包んだ外交官が、一流ホテルに入っていく、領土問題で紛争中の相手国の外相とにこやかに笑いあいながら握手をしているものだった。

ようやく漕ぎ着けた停戦もしくは終戦にむけた会談らしく、終始にこやかな雰囲気醸し出されている。

だがそれを見た瞬間、怒り一色にユウナの心は塗りつぶされた。

「父さん!!」

よりもよってオーブ側の代表はユウナの父、ウナトその人だったのだ。

(そいつは敵じゃないか！なぜ笑いながら手を握る事ができるんだっ!!！)

唇は紫色になり、いくら走っても体の震えが収まらないこの寒空の下、オーブの為にと一生懸命な自分が道化にしかみえなくて。

そしてそれが堪らなく悔しくて、ユウナは黙っていられなかった。

「そいつは倒すべき敵なんだっ！ そんなヤツとっつ！！ ふざけるなっつっ！！！」

オーブの為に厳しい訓練に耐えている自分の気持ちを踏みにじられたと、こぶしを握り締めるユウナ。

「ではどうする？ いつまで戦うつもりだ？ 一人残らず殺すまでか？ 老若男女を問わずに。」

その声到我に返るユウナ。

振り返った先には、同じく雨に打たれてずぶ濡れになっているクルーゼが静かに立っていた。

「き、教官……………。それは……………」

ただ立っているだけのハズのクルーゼから威圧感を感じてしまうユウナ。

「純粹にオーブの為に怒れる様になったのは進歩と言っても良いが、……………なっちゃいないな。」

進歩の無いヤツだと暗に言われた気がしたユウナは、意地で声を絞り出した。

「ではどうしろと！？ 何が出来るって言うんですか！ この僕に…………！」

しばしの沈黙の後、サングラスを外すと少しだけ寂しそうな表情

で、クルーゼは口を開いた。

「オレのような軍人は戦争をする事は出来る。が、終わらせる事は出来ない。」

「それをできるのは政治家だけだ。」

「今の気持ちがあるのなら、……前線で戦う兵士の気持ち判る今なら、進むべき道を決める事ができるんじゃないか？」

それだけ告げると踵を返し、静かに歩き出すクルーゼ。

唖然としかけたユウナだったが、いまだ怒れる心とは裏腹に思考の一部が冷静になっていくのが自身でも判った。

眼前の【彼】は何をした？ いや、してくれたのか？

今の自分がオーブへの想いを持つにいたった経緯は、【誰】のお陰なのか？

気が付いてしまった、ちがう 気がつけて良かった。

そう感じた刹那、体が自然と動いていた。

直立不動、そして、敬礼。

体に叩き込まれた一連の動きを、当たり前に行う。

「クルーゼ教官っ！」

その声に反応したクルーゼが振り返るのとほぼ同時に、ユウナは声を限りに感謝の言葉を伝えた。

「ありがとうございます……！」

動かずに敬礼を続けるユウナに初めて微笑を向けるクルーゼ。

「いっばしの面構えができる様になったじゃないか。……………
ユウナ。」

そう言った後ゆっくり近づくと、手に持っているサングラスを彼の胸ポケットに差しこんだ。

「餞別だ。悪いがこんなモノしかやれん。好きに処分するといい。」

それはクルーゼがはじめてユウナを認めて、名前を呼んだ瞬間だった。

訓練を終了したユウナはこの後、改めて大学に進学し政治家を目指す事になるのだった。

「……………なんとも、凄まじいな。君とラウの間にそんな事があつたとはな。」

驚愕の表情でユウナを見るデュランダル。

「いや〜〜、恥ずかしいので他言無用でお願いします。」

照れてそう言いながら、手元のサングラスをいじり続けるユウナ。

（お守り代わりになっちゃったな、あの時胸ポケットに入れてくれたこのサングラス。）

「となると、だ。次は私の番、……………と言ったところかな？」

「えっ……………？」

全く予想外だったのか、意外と言うより驚いた表情でデュランダールを見るユウナ。

そんなユウナに苦笑しながらデュランダールは続けた。

「なに、時間はまだあるし、私が話さないのは不公平だろう？」

とんでもないと恐縮するユウナに対して、ほほ笑みながら話そうとしたデュランダールだったが、機内の空気がそれを中断させた。

慌てた様子で随員が2人、ユウナとデュランダールの元に駆け寄ると、メモの様な紙をそれぞれに手渡したのだ。

「……………なっ！……………」

同時に絶句する2人。

（マリュー・ラミアスがG計画の技術主任だっ！ 彼女はタリアが地球連合軍からヘッドハンティングしたと言うのに。まずい事になるかもしれん。タリアの身辺警護を強化しておいた方が無難か

?)

(サハク家の一部の者が逃亡した?! しかもプラントから極秘に入手したジンのOSと、開発中のアストレイのデータの一部を持ち出して! えらい事になった。今回のプラント訪問は、すんなり終わらない事が確定したな……)

数瞬後、顔を見合わせた2人はお互いの手に持つメモを交換し、再び同時に絶句した後、頭を抱えてしまうのだった。

第9話

ドアを開けて入って来た男性を見たその瞬間、私、マリユール・ミアスは思わず声を出してしまった。

「ムウ・・・・・・・・、あなたが何故・・・・・・・・」

余りに小さい声だった為その男性に聞こえなかったと思うが、その後のよそよそしい私の態度をまだ体調が思わしくないと判断してくれたらしく、名前と所属の確認だけ済ますと、もうしばらく医務室で休養する様に告げ立ち去ってしまった。

医務室のベットに横になってはみたものの、ザフトの捕虜に - もしくは保護 - された現状ではさすがに寝付く事は出来ず、思いだしたくもない事を、思い出すだけの結果になってしまった。

ヘッドハンティングされて、モルゲンレーテに向かう飛行機の席が隣になると言う偶然が無ければ、私がムウと恋に落ち、恋人となる事など無かったのかもしれない。

そして彼に振られる事も・・・・・・・・。

あの日、約束の場所にこなかったカレ。

フラガ家を捨てても私と一緒にになりたいと言ってくれたムウを信じ待ち続けた私は、悪夢の様な現実に打ちのめされる事になった。目の前のオーロラビジョンで発表されているフラガ家と資産家令嬢との婚約発表。

さわやかな笑顔を令嬢に向けているムウを直視することなどできる訳もなく、その場から逃げる様に走り去った私だった。

数日出社を拒否した揚句、心配して訪ねてきたタリアに八つ当たりしてしまったのは、今でこそ笑って話せる過去になったが、あの時タリアに叱咤されなかつたらどうなっていたかと思うと、彼女には感謝してもしきれない。

だと言うのに、タリアに相談することなくG兵器開発主任になる事を承諾してしまった。

その時の私はもう大丈夫だと言外に言ったつもりになっていただけで、ムウの事を忘れる為に没頭できるナニカが欲しかっただけなのだ。

そして、そこにあるリスクに無理やり目を瞑ってしまった。

結果、そのリスクは最悪な形で表面化してしまった。

今回もタリアは心配してくれているのだろうか？

いや、今度こそ愛想を尽かされてしまったかも……………。

「ダメね。どうしても考えがネガティブな方に行ってしまった。」

兎に角、心を一旦リセットする方法でも考えよう。

そうでも思っていないければ、自己嫌悪の深い闇にはまり込んでしまふ、今の私はそれが一番怖かった。

(でも、やはり一人はつらいわね……………、自分で蒔いた種とはいつても……………)

（そんなに似てるかあ）、オレとムウが？ 確かに遺伝上は父と子になるし、年齢的にはむしろ兄弟……、なるほど、似てるか。）

まさか既にマリユールとムウが知り合い、と言うより、どうも恋人同士なのではと思われる独り言を漏らしたせいと言うか、余りに予想外な事実とつらそうなマリユールの顔を見たせいと言うか、毒気を抜かれたオレは半ば退散する様に医務室を出てきてしまった。

（G兵器やアークエンジェルについて、緊急で必要な情報も無いしな。どうせ彼女の処遇はプラント本国が決めてくれるだろう。何らかの交換条件はつくと思うが、オーブに返してお終いだな。……オレとしても、それで特に問題ないな。）

ちょうど食事の時間帯なので、これからすべき事をまとめながら食堂へと向かう事にした。

（まずはキラに会って、知己を得たいところだな。一兵卒としてこの戦争に参加したいと思わない方向に持っていければベターではあるが……。とりあえずアスランとニコルに話をさせてみるか。）

すでに原作からの乖離がシャレにならないので、今更の感があるにはある。

（次はアークエンジェルのクルーか。原作では二つの戦争を切りぬけた戦士達だから、そのままクルーとできれば心強いんだが、正直言って不可能だな。ナタルを含めたブリッジクルーに声をかける事はかけたが、説得した訳ではないしな。いきなりプラント側、つまりはコーデイネーターに味方してくれと言われて、ハイ判りましたと言う訳がないか。）

せいぜい捕虜交換要員として使われるのがオチだろうが、正直もつたいない。

（最後にフレイか。彼女が一番厄介な気がする。何故かは判らんが、オレのカンがそう告げている。）

しかも、下手をうつと高度な国際問題に発展する可能性がある。今のジョージなら、単純に娘が心配だからと原作の様な行動をする事は無いと思うが、今一つ自信が持てない。

（親バカな所は治って無いみたいだからなあ……………）

無理難題ばかりで、手に負えない感が溢れんばかりの現状にげんなりしつつ、オレは目的地に着いたのだった。

（しかし、原作のクルーゼは凄いな。オレはとてもしゃないが、フラガ家に復讐するような時間的余裕は無かった。最もあったとしてもする気はなかったが。）

お陰で今だフラガ家は健在で、現当主のムウ・ラ・フラガは、そ

れなりに影響力のある資産家として知られている。

（そう言えば今年に入ってからだだったかな？ アル・ダ・フラガが老齢に因る心不全で亡くなったのは。・・・アレ？ そういえばムウって既婚者だったよな？ 相手はマリユージュじゃなかったから、彼女失恋してるのか？）

色々考えそうになったが、所詮赤の他人の恋愛事情。
詮索するのバカバカしく、オレはそこで考えるのを止めた。

（オレにも春が来ないかなあ。）

クルーゼになって、全くその手の話が無かった訳ではないが、どちらも良い思い出ではないので頭を振って追い払った。

（イカン、イカン。こんな事考えている場合じゃないって言うのに。）

心の中で苦笑しつつ、オレは食事を摂る為、比較的空いている席に座る事にしたのだった。

「えっ？ ラウ兄さんの事？」

興味津津の顔で聞いてくるミアリア・ハウに対し、フレイは少し考えるそぶりを見せた。

「フレイって、かなりガードが固いでしょ。それなのに自分から男の人に抱きついたりするんだもの。そりゃー関心持ちっちゃうわよ。」

ミアリアの表情から、はぐらかすのは無理だと判断したのか、しようがないわねと姉の様な心境でフレイは話す事にした。

「ん〜〜そうね、残念だけど、間違いなく第一印象はサイアクだったわ。」

意外そうな顔をするミアリアに対して、最初にあった頃を思い出しながらフレイは続けた。

「どうも書類に不備があったらしく、ラウ兄さんの事を最初はコ―ディネーターだと思っていたのよ、わたし。」

「エツ？ でもフレイってその辺全く気にしないじゃない？ それに姉御肌って言うか、世話好きって言うか、今日だって避難命令が出てる中、キラを一人で行かせるのをよしとしないフレイが音頭を取った様なものじゃない。」

言っとくけど、非難してる訳じゃないからね、と、舌をだしながらミアリアが言うのを苦笑しながら聞くフレイ。

「それに関しては悪かったと思ってるわよ。結果的に助かったけど、一つ間違ったら全員死んでいてもおかしくなかったものね・・・」

「……」

「でも、その辺も含めて全部、ラウ兄さんに出会って変わったのよ、わたし。」

信じられる、それまではコーディネーターと言っただけで嫌悪してたんだから。

そう言うフレイを信じられない顔で見るミリアリアに対して、言葉が続けるフレイ。

「転機となったのは、父が暗殺されそうになった事があってからなのよ。」

少し遠くを見る目をしながら、フレイはその時の事を話し始めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341o/>

クルーゼになった男

2011年8月16日15時33分発行